

[野菜部門]

2. 1果重が大きく多収である四季成り性イチゴ系統「Y」の育成

[要約]

本県育成の四季成り性イチゴ系統「Y」は、準高冷地において6～11月に収穫でき、200kg/a以上の商品果収量が得られ、1果重が小さくなる9月においても平均9g以上の果実を得ることができる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 高冷地研究室、野菜・花研究室

[連絡先] 電話 0867-66-2043

[分類] 情報

[背景・ねらい]

夏秋期には主にケーキ等の加工用のイチゴの需要があり、年間を通じて花芽分化・結実する四季成り性品種が栽培されているが、既存の優良な四季成り性品種は契約上自家増殖ができないものが多い上、種苗費が高い。そこで、6～11月に収穫ができる四季成り性を備え、1a当たり200kg以上の商品果収量が得られ、かつケーキ等での使用に適する大きさの果実を確保できる系統を育成する。

[成果の内容・特徴]

1. 四季成り性イチゴ系統「Y」は、2006年に「エバーベリー」に「さちのか」を交配して得られた交雑実生個体であり、2006年に四季成り性の確認と一次選抜を行い、2007年から二次選抜を継続し、育成した系統である（図1）。
2. 商品果収量は200kg/a以上で、「サマールビー」と同等以上である（表1）。
3. 商品果1果重は6～11月の平均として約12g、最も小さくなる9月においても平均9g以上と、「サマールビー」よりも大きな果実を得ることができる（表2）。
4. 果実品質のうち、硬度は「サマールビー」と同等かやや高く、糖度及び酸度は同等かやや低い（表3）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本成果は、標高450mの準高冷地で得られたものであるが、最高気温が30℃を超える日が8月下旬～9月上旬にも多いような高温年には、10月以降の収量が少なくなる可能性がある。
2. 商品果収量データは、雨除けハウス内での高設栽培で得られた1株当たりの平均商品果収量を基に、666株/a（ベンチ幅110cm、60cmプランタ当たり5株）栽培した条件を想定して算出した。
3. 本系統はジーンバンクに登録する。

[具体的データ]

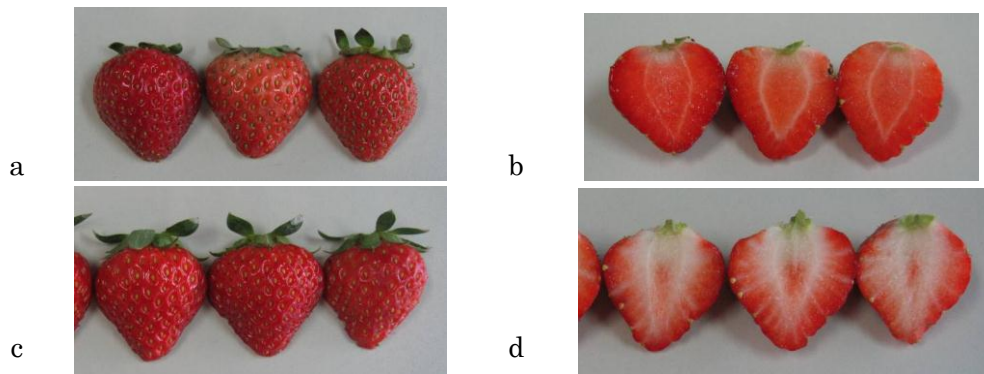


図1 育成した系統「Y」の果実（2010年8月）

注) a:「Y」の外観、b:「Y」の切断面

c:「サマーレビー」の外観、d:「サマーレビー」の切断面

表1 月別の商品果収量（2012年）

品種・系統 ^z	商品果収量 ^y (kg/a)						合計(6～11月)
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
(育) Y	7	108	61	44	21	11	251
(対) サマーレビー	7	84	75	44	8	3	221

^z (育)は岡山県育成系統を、(対)は対照品種を表す

^y 4g以上で不受精、変形等の障害がないか軽微な果実の収量

注)2011年8月4日に親株からのランナーを挿し苗し、雨除けハウス内で育苗。2012年4月20日に岡山農研式高設栽培システムに定植し、活着後は給液をEC0.6～0.7dS/mで管理。「Y」は1果房当たり3果、「サマーレビー」は1果房当たり5果残して摘果。本圃ハウスでは、換気、遮光及びウォーターカーテンによる昇温抑制策を行った

表2 月別の商品果1果重（2012年）

品種・系統 ^z	商品果1果重 ^y (g/果)						平均(6～11月)
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
(育) Y	16.8	15.0	10.0	9.6	11.1	10.1	11.8
(対) サマーレビー	18.7	11.8	8.0	6.1	7.5	9.3	8.7

^z (育)は岡山県育成系統を、(対)は対照品種を表す

^y 4g以上で不受精、変形等の障害がないか軽微な果実の1果重

表3 果実硬度、糖度及び酸度の推移（2010年）

品種・系統 ^z	調査月 ^y	硬度 (gf/3mmφ)	糖度 (Brix%)	酸度 (クエン酸換算%)	糖酸比
(育) Y	7	100	6.9	0.9	7.6
	8	115	6.1	1.1	5.4
	9	160	8.4	1.1	7.7
(対) サマーレビー	7	118	7.8	1.2	6.5
	8	104	7.6	1.1	6.7
	9	122	9.1	1.3	7.2

^z (育)は岡山県育成系統を、(対)は対照品種を表す

^y 各月の調査において、7～8分着色した4g以上の果実を5個調査した

[その他]

研究課題名：中山間地域に適した野菜新品種の育成・選定と品種特性を発揮させる栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2010～2014年度

研究担当者：佐野大樹、岸本直樹、中原範子、松岡静江、神谷忠利